慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	四國方面旅行記
Sub Title	
Author	淺村, 一郎(Asamura, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.163(365)- 170(372)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

め全ての材は手斧を使用したものであると云はれ、又生木の柱といふものが立つてをり古色蒼然たるものである。元來江川家は大和源氏の裔で、祖先宇野親信の時大和より十三人の郎黨を引具して移りてこの地を領し、源頼朝に應じて戰功あり江川庄一圓を與へられた。後第二十八世英長に至り德川家康に用ゐられ、伊豆の代官となり、爾後子孫これを世襲したのであつたが、幕末の偉才坦庵江川太郎左衞門英龍は實にその第三十六世に當ると語られた。

次いで別室に陳列してある家寶を拜見する。それは主に坦庵に關係のあるもので、銃陳調練之記、御塾簿日記、大小砲操練出席姓名帳等あり、又韮山反射爐製の彈丸數個あつたが、殊に我々の眼を惹いたものは、水戸烈公、鍋島閑叟、藤田東湖、高島秋帆、阿部勢州、佐久間象山、渡邊崋山等の書翰類で烈公、象山の書中には中濱萬次郎の名も見えてゐる。何れも幕末に於ける坦庵の活躍を窺ふことが出來る。床間には高島秋帆の掛軸があり、欄間には坦庵座右の銘「忍」の自筆の額面が掲げてある。

一同江川家の手厚い歡迎に感謝しつつ、一路韮山驛に急ぎ、午後六時同驛で一先づ解散することにした。

かくして二日間に亘る見學旅行は無事に終了した。此度の旅行も例によつて忙しい見學を續けたが、幸にも天候に惠まれて愉快に完了出來たことは誠に喜ばしい。終りに本旅行に於て各方面で與へられた御好意に對し、厚く感謝の意を表する次第である。(淺村一郎記)

四國方面旅行記

昭和十三年十月五日午後九時東京驛發四國方面の史學旅行の途に就く。一行は指導教授伊木壽一先生と共に先輩齋藤咸氏、及び學生清水秀雄、若櫻木叡、川村善三郎、山口文夫、淺村一郎、永見良、岡田平太郎、水町龍雄の都合十名。

東京驛頭に松本芳夫先生を始め、鈴木泰平、渡邊基、小川鉚一の諸君が吾々を見送つて下さる。一同寢臺車の中央を占め、雜談に耽つたが、十二時過ぎ、明日よりの見學に備へて床に入る。

十月六日午前七時七分京都着、川村君昨夜來の發熱の爲、四國行を中止して下車、これで一行は伊木先生以下九名となる。京都に到るまで曇り勝ちの空模樣で、その前途を危ぶまれたが、京都驛を出て西下するに從つて青空が擴がり、旅行日和となつて來た。大阪驛を出て二十數分、去る七月、六甲山麓を襲つた大出水の慘狀が次々に車窓に寫し出されて行く。それは吾々が曾つて想像した以上に慘憺たる光景で、文化が自然の偉力に、完全に敗退した姿であつた。午前十時五十六分、岡山驛にて宇野線に乘換へ、同十二時二十分、宇野棧橋に着く。直ちに連絡船南海丸に乘船し、瀨戸内海を横斷して四國高松に向ふ。船は滑る樣に波を蹴つて進み、空は愈々晴れ渡り、内海の潮風が船中を流れる。陸と水との調和の美は、吾々に海國的興奮と歡喜とを與へて呉れる。一行はこの美しき眺めを樂しみつつ中食を攝る。左手に屋島の高臺がぬ1つと見えて來る。航行一時間で高松棧橋に着く。棧橋より程遠

からぬ所に玉藻城の名ある高松城址が海に映つて見える。

當城は天正十八年生駒氏の手に築かれ、黑田如水の設計と傳へてゐる。ここに生駒氏四世、五十四年間居城し、後出羽に移されるに及んで、寛永十九年松平賴重が常陸より入城し、明治維新に及んだと傳へてゐる。現在殘つてゐるものは、僅かに城壘、隅櫓及城門を存するのみである。

船を降ると、棧橋まで、今年國史科卒業の先輩堀野滿治氏がわざ〳〵出迎へて居られ、東道の勞をとつて下さる。驛前より自動車二臺に分乘し、高松の市街を通つて、先づその東端にある屋島に向ふ。

屋島はその名が示すやうに屋根形をした海拔約三百米の高丘で、內海に突出した半島である。今日は瀨戸內海國立公園の展望臺として、唯一無二の場所であり、過去に於ては源平爭覇の古戰場として廣く世間に知られてゐるが、既に天智天皇の御代に築城を見た程瀨戸內海交通の要地であつた。

驛より約二十分で屋島神社前に着く。同所よりケーブルカーで山上に登れば、平坦な小松原を分けて、鋪裝された廻遊道路がつくられてある。約十分の徒步で、四國遍路第八十四番の札所屋島寺に達する。

當寺は唐僧鑑眞の草創で、弘仁元年弘法大師が嵯峨天皇の勅を奉じ、それまで北嶺にあつた寺を現在の南嶺に移したと傳へてゐる。南面山千光院と號し、宗派は古義眞言宗に屬してゐる。

「南面山」と書ける額を掲げた山門を潛ると、正面に室町時代の建築樣式を具へた本堂がある。左手に小さな額が掛けてあり、「あづさゆみ屋島の寺に詣でつつ祈りをかけて勇むもののふ」と此の寺の御詠歌が書いてある。同所で尼僧の案內を受けて本堂左手にある寶物館を見る。その見學した主なものを擧げれば次の如くである。

一、後陽成天皇宸筆「南無天滿大自在天神」　一幅
一、後小松天皇宸筆「天滿大自在天神」　一幅
一、傳小野道風筆、雲龍の額　一幅
一、千光院屋島寺緣起　一卷
一、筆者不明、源平屋島合戰繪卷物（桃山時代作）　一卷
一、土佐光信筆、那須與一射扇之圖　一幅
一、土佐光起筆、佐藤繼信戰死之圖　一幅
一、土佐光信筆、屋島合戰之圖　一幅

等で、その他源平に關係した遺物と傳ふるものを多數藏してゐた。かくて鐘樓に懸かつてゐる蓮阿彌之鐘（貞應二年鑄造）を見て、午後三時十分寺を出で、山門より約十分西に進むと獅子の靈巖と稱する展望所に出る。同所から下を見ると、高松の市街が脚下にあり、その周圍は碁盤目の如く整然とした藍田に包まれ、その彼方は近くに遠くに大小の島島が點在し、內海の風光を一眸に收むることが出來る。眞に內海展望臺の名を恥かしめぬ所である。此所から小松原の間を進むこと十分、獅子の靈巖と反對側にある談古嶺に出る。同所は五劔山と相對し眼下に壇の浦の入江を抱いてゐる。臺上に立つて見渡すと眞下には安德天皇の行宮址をはじめ、佐藤繼信菊王丸の墓所があり、對岸五劔山の麓には平家の勇將能登守敎經の船隱場があり、右手の入江の奧まつた所には扇の

的、義經の弓流し等の古蹟、源平戰史を飾つた幾多の古戰場が手にとるやうに見え、懷古の情にそそられ、淡い感傷がわいて來る。一同限りもない名殘りを惜みつつ午後四時もと來たケーブルカーで屋島を下り、待たせて置いた自動車に分乘し、高松市南端に在る日本三公園の一つ栗林公園に向ふ。

當公園は紫雲山の麓を利用して、寛永十九年藩祖松平頼重の創めたもので、その後藩公の別墅として、幕末に至る間營まれたものである。明治維新後長らく荒廢に委せられてゐたが、縣營公園となつてより漸次昔の風致を恢復したといはれてゐる。栗林の名は莊子、山木第二十章「遊於栗林」から出たといふ說と、現地の北園一帶がもと栗の林で誰云ふとなく「栗之御林」と呼んでゐたに因つたとする說とがあるが、孰れが眞なるか不明である。

一行は當園を一通り巡覽したる後、再び待たせて置いた自動車に分乘して、一路琴平に急ぎ、五時三十分宿舍虎屋旅館に着き、ここに第一日の行程を了へた。

明くれば七日の朝、天高く馬肥ゆとか云ふ秋晴の氣持よさ。八時に朝食を攝り、先づ虎屋旅館所藏の寶物を見學する。主なものは

一、讚岐象頭山十二境詩　寛政十三年辛酉孟春應石原生需皆川愿題　一幅

一、大雅遊鞍馬山詩、玉瀾圖、韓天壽跋　一卷

等で、その他卷物、掛軸を多數藏してゐる。かくて九時に旅宿を出で、國幣中社金刀比羅神社に參拜する。

同社琴平山（象頭山）の靈域にあり、祭神は大物主神を主神とし、崇德天皇を配祀し奉る。古來海難除の神として、又開運の神として、特に航海者の信仰を受け、所謂「金比羅參り」といふ言葉は、伊勢參りと共に、一生一度の願望とされてゐた所である。

宿を出て右に數歩すると直ちに二間半程のやや勾配の急な石段を挾んで土產物の賣店、娛樂場等が軒を並べて客を呼んでゐる。此の門前街を通つて登つて行くと、今度は石段の兩側に寄附金の石碑が櫛比してゐる。その額の大きなのに、先づ驚かされるが、それに依つても「金比羅さん」の信仰力を知る事が出來るように思はれる。登ること約三十分で社務所に達する。刺を通じて來意を告げ、先づ本殿に參拜する。本殿に達する途中左手に旭社がある。此の社は天保八年の建築で高野山の金堂を移轉したものと云はれ、全く二層入母屋造りの佛殿式に造られて、他の諸建築物と統一を缺くものであるが、それは明治に入つて當社が神社に編入され、金刀比羅神社と改稱された以前、金比羅大權現と稱して榮えた昔を物語つてゐるものであらう。

旭社の前から賢木門を經て、更に急勾配の石段を數十段登り切つたところに本殿がある。本殿は明治十一年に再建された權現造りで、その背後の山は鬱蒼として茂り、その中に奥の院がある。老神官の案內で、色々と說明を聞き、本殿を脊にして見晴すと、今登つて來た石段を足下に、その先は琴平の門前町に續き、ずつと擴がる讚岐平野が一眸の裡に見渡され、木立に包まれた村落が點在してゐる。左手には讚岐富士と云はれてゐる飯野山が望まれ、その彼方には瀨戸內海が煙つて居り、昨日にも劣らぬよき眺望である。

境内は出征兵士の武運長久を祈る人々で賑つてゐる。本殿の左手に繪馬殿があり、多くの繪馬が掲げてある。その中で最も吾々の眼を惹いたものは、所謂「流し樽」である。老神官は「それは船舶が讃岐沖を通過するとき、乘組員が初穗を上げるために醵金して、これを樽に容れ海に流すと、讃岐海岸に漂着し、村役場や篤志家の手によつて、お宮に奉納されたものである」と説明された。ここからもと來た道を通つて社務所に引返す。一同は表書院に通されて茶菓のもてなしを受ける。此の表書院は俗に千疊敷とも云つて、萬治二年の建築といふことであるが、その各部屋の襖、明障子、床の間等に描かれた貼付繪は、圓山應擧、伊藤若冲、岸岱、邨田丹陵等の名手が描いたもので、その主なものを擧げれば左の如くである。

一、鶴之間（國寶）　天明七年應擧筆
一、虎之間（國寶）天明七丁未夏月寫、平安源應擧　印
一、七賢之間（國寶）　天明七年應擧筆
一、瀧之間（國寶）寛政甲寅初冬寫平安源應擧　印
一、富士之間　丹陵筆
一、柳之間、天保十五年歳次甲辰夏日　同切筑前介岸岱寫
一、菖蒲之間　岸岱筆
欄間にも同じく岸岱の蝶がある。是れは文晁の弟子文山が蝶を調べ、岸岱が畫いたものと云はれ、その描く所の蝶は二百餘種、この内今日學者によつて判明せるものが、九十六種あるとのことである。
一、松之間　岸岱筆
一、四季之花之間　若冲筆
一、錢細工（雞雄雌二羽を錢で作つた細工物）　植巳作
文政三年江戸吉兵衛、奥州坪田吉人獻納

等であつた。表書院の見學を終り、今度は來た道とは反對の裏道を通つて、山の中腹に在る學藝館に向ふ。

同所で見學した主なものを列擧すれば左の如くである。

一、傳空海作、十一面觀世音菩薩像（國寶）木彫著色　一軀
一、短刀（國寶）　筑前住國弘作　一振
一、後奈良天皇宸翰　一幅
一、後水尾天皇宸翰　一幅
一、後陽成天皇宸翰　一幅
一、孝明天皇攘夷御祈禱綸旨　一幅
近來外夷迫々跋扈深被惱云々
三月四日　右辨小俊政

等である。なほその外に、觀應元年十月、當宮神事記、足利義詮、同義滿以下の寄進狀などもある。同所を出てその裏手にある圖書館に行く。見學した主なるものは左の如くである。

一、岡田爲恭筆、武者繪粉本　一册
一、寛文五年切支丹宗門改引受證文　一
一、正德元年切支丹制札　一
一、賀茂眞淵書入萬葉集　二十卷
卷末に
寶曆九年閏七月五日第六度ノ會讀訖
其後自爲注而考猶有未

委之事、仍重而爲會也、
明和二年正月二十八日會集訖
同四年八月獨正訖、賀茂眞淵七十一歳

との書入がしてあつた。

かくして金刀比羅神社の見學を終つた時には、時計はもう正午近かつた。門前街の裏手を通つて、琴平參宮電車驛前に到着したのであつたが、時間の關係上、電車を止めて自動車二臺に分乘して善通寺に向ふ。車を走らすこと約二十分、今登つた象頭山を背後に、右手に讃岐富士を望み、第十一師團司令部を通り、十二時十分町の中央に在る善通寺に着く。

眞言宗善通寺派の本山たる當寺は四國遍路第七十五番の札所で、五岳山誕生院と號してゐる。この地は弘法大師誕生の地で、大師の父佐伯善通が莊園の跡と傳へてゐる。大同元年大師が唐より歸朝して、父善通、母玉寄及び祖先の追善を營み、且つ布敎の爲め堂宇を建立したものといふ。その後頽廢したので、後宇多天皇の御代に修繕したのであつたが、更に火災に遭つて、今の伽藍は永祿年間以後のものと云はれてゐる。

「眞言宗本山善通寺」の額を掲げた赤門を潛つて境内に入る。仁孝天皇の勅願により建立された五重塔を右手に見て、直ちに左に折れた正面に本堂がある。同所で住職の案内を受ける。此所で同寺に祕藏されてゐる大師傳來と傳へる金銅錫杖（國寶）を小僧の命令で一同合掌し、口で南無阿彌陀佛を唱へて拜觀する。高さ七八寸の錫杖、金色に輝いてゐる。表に上品上生の彌陀三尊その裏に下品下生の彌陀三尊及び二天王が鑄つけてあつた。

本堂の裏手に在る寶物館に向ふ。其所で見學した主なものは次の如くである。

一、建治二年八月廿一日蒙古治罰御祈禱狀　一卷
一、承元三年八月、嘉祿元年四月、寶治三年三月、建長四年九月、弘安六年四月各廳宣　五卷
一、寛喜元年五月十九日、弘安四年八月廿八日、同九年十二月廿三日各官宣旨　三卷
一、正嘉二年十二月廿四日、建治二年六月九日、承仁二年六月四日各院宣　三卷
一、關東訴狀（殘缺）　一卷
一、豐臣秀吉消息（五月一日花押、さいしやう充）　一幅
一、德川家康書狀（正月廿三日）　一幅
一、澤庵禪師書幅　一幅
一、般若心經　一卷
一、閻浮檀金錫杖（國寶）　一箇
一、吉祥天立像木造（國寶）　一軀
一、地藏菩薩立像木造（國寶）　一軀
一、土佛藥師如來御顏（大）　一箇
一、銅鐸（一尺七、八寸）　一箇
一、善通寺伽藍圖　二幀
一、御花見道中用具、德川中期辨當兩掛　二箇

等で、なほ鎌倉時代以後の綸旨、院宣を始め公武その他の古文書數卷、佛像、佛畫、古寫經等が多く陳列されてあつた。此所で住職と別れ、先の道をそのまま戻つて、赤門と五重塔との中間に在

る利生塔を見る。高さ一間程の石塔で、側の標札に「足利尊氏數度の戰に戰死せる死者の菩提を弔て罪業消滅の爲め全國六十六臺の石塔を建立せられ、此塔は康永三年十二月十日直義に命じ建立せられしものにして、日本第三の供養塔なり。」と說明してあつた。

暫く待たせてあつた車に分乘し、善通寺驛に向ふ。これで無事第二日目の見學を了へて、同驛を午後二時七分に發ち、多度津で乘換へ、松山市に向ふ。車中で遲目の中食を攝る。豐濱へ三時五分に着く。昨日より二日間に亙つて案內の勞を執られた先輩堀野氏が下車される。

松山驛に午後五時三十分に着く。驛まで宿の女中が迎へに來て吳れる。街に漂ふ松山市の雰圍氣は吾々に浪漫的な感情を喚び起させて吳れる。驛前より自動車で眞直ぐに道後溫泉に走る。此所は又思ひ掛けない繁華な溫泉町である。松山と道後とは背中合せであるが、吾々は全く對蹠的な印象を刻み込まされた。道後は攝津の有馬と共に、その歷史は古く、景行天皇、仲哀天皇、神功皇后、聖德太子、舒明天皇、齊明天皇、仲大兄皇子、天武天皇の行幸啓の地であるが、これは御遊山的の御入湯といふよりも、寧ろ九州・朝鮮の經營の中繼地として瀨戶內海の水軍統御の爲めであつたかと思はれる。一行は岩井屋旅館に泊る。吾々も「坊ちやん」が泳ぐのを禁止された湯壺で旅塵を洗ふ。夕食後町を一巡して、靜かな眠りに入る。

明くれば八日、今日も又上天氣である。七時半に朝食を攝り、八時に旅館を出る。八時七分直後驛で伊豫鐵道に乘る。正岡子規が「松山や秋より高き天主閣」と吟じた松山城を左窓に見て、古町で乘換へ、高濱に九時に着く。同所で石崎汽船の便船に乘り込む。大小幾多の島嶼を縫ふて航行すること約三時間、右手に四國第一の高峰石鎚山を見、道後半島を廻つて、途中御手洗、木之江の各港に寄つて正午過ぎ大三島宮浦の沖合に碇泊する。船中で早目の中食を攝り、沖合からポン〳〵船に乘換へて宮浦港に向ふ。遙か入江の奧まつた所に、海岸に近く聳え立つてゐる大山祇神社の大鳥居が見える。近い樣でなか〳〵遠い。海は油を流したやうに靜だ。やつと着く。樹木の多い平和な島である。海上から見えてゐた大鳥居を潛り、淋れた門前町を通つて行く。折から慶明野球戰の放送で、町のラヂオは慶應の應援で賑はひ、高木の好投を傳へてゐる。徒步約十五分で第二の鳥居に着く。左手に「大日本總鎭守大山祇神社」と刻した石柱が立つてゐる。この大日本總鎭守といふのは有名な三蹟の一人藤原佐理が神託によつて書いて納めたと謂はれる額の文字から出たのであらうが、中世以後、海上を舞臺に大活動をした水軍所謂海賊の信奉を集めてゐたことに關聯せしめて考へて見るのも面白からう。

當社は大山積神（和多志大神）を祀る國幣大社で、俗に三島大明神と云つてゐる。文獻に在る古いものを求めると釋日本紀所引伊豫國風土記に

乎知郡御島坐神、御名大山積神一名和多志大神也、是神者所二レ顯難波高津宮御宇天皇御世一、是神自二百濟國一度來坐、而津國御島坐云云、謂二御島一者津國御島名也

とあり、當社の歷史は非常に古く、歷朝の崇敬を受けてゐた。その神位を見るに、稱德天皇天平神護二年に從四位下を、宇多天皇

寛平九年に正一位を授けられ、社格は仁明天皇承和四年に名神となり、更に醍醐天皇朝の延喜式に於ては名神大社に列し、後伊豫國一宮として廣く崇敬せられた。又鎌倉時代に入つてからは、大小の武家が歸依するやうになつたのであつたが、伊豫の越智氏は當社を氏神としてその一族が代々神主となり、所謂三島水軍の守護神として尊信したので、四方にその神威が輝きわたつた。この越智氏の子孫である伊豫國守護職河野通信は三島水軍を率ゐて源義經を援け、その曾孫河野通有は、當社の社殿に參籠して蒙古退治の起請文十枚を書き、三島水軍を率ゐて筑前に發向し、元寇殲滅の殊勲者として勇名を天下に馳せたのは周知のことである。かくて三島水軍の御大たる河野氏は瀬戸内海の制海權を掌握するに至つたので、中國、四國、九州を始め各地の群雄は河野氏の歡心を買はんとする意味もあつたか、其氏神である當社に、その時代に於いて盡せる丈けの技巧を盡した甲冑、刀劍、弓矢等を奉納したのである。今日當社に藏する兵器類の國寶が日本全國の約八割を占め、更に甲冑の國寶に至つては、爾餘の各所に保存せられる國寶甲冑の約二倍を藏してゐる所以もこれが爲めである。室町以後、戰國時代に入つては河野氏の一門である村上氏が勢力を得るやうになり、日本海賊大將軍と稱して、三島大明神、八幡大菩薩の旗を支那朝鮮の沿岸地方から印度方面まで靡かせた所謂倭寇又は八幡船も、當社と密接な關係があつたのである。

第二の鳥居を潛ると、左手に社務所がある。同所で案内を受け、正面の石階を數段昇ると社殿がある。

社殿は最初大寶年間に造營せられたと傳へてゐるが、後屢々燒失し、現在の社殿は室町時代天授四年に再建されたもので、拜殿、幣殿及び本殿から成つてゐる。拜殿は七間四面の切妻造本瓦葺で、本殿と同時の建築と傳へられてゐるが、後世修理の際改造された部分が多く、甚しく舊態を損じて居り、慶長の頃の建築と思はれる。幣殿は拜殿と本殿との間にあり、本殿は三間社流造、檜皮葺の建築で元亨二年兵火に罹り、天授四年に再建せられたのであるが、當時の舊態をよく存し、床高く、頗る雄大な建築で國寶である。蟇股には牡丹唐草、菊唐草の彫刻を施し、左右兩側の緣にある脇障子の欄間には、葡萄の透彫がしてある。社殿の見學を終り、右手の小高き丘にある國寶館に案内される。途中左手に寶玉塔、寶鏡塔、寶劍塔の三石塔がある、高さ一間位のもので伊豫國守護職河野道信の孫一遍上人が奉獻したものと傳へ、鎌倉時代のものである。

寶物館で見學した主なるものは次の如くである。

一、銅製水瓶（平重盛奉納）　二箇
一、紺絲威鎧（河野家累代使用、鎌倉時代以前）　一領
一、澤瀉威鎧（延喜時代のもので、本朝最古の鎧と謂ふ）　一領
一、淺黄絲妻取鎧（鎌倉末期、南北朝時代）　一領
一、紫綾威鎧（保元平治頃の作）　一領
一、緋威鎧（源義經の奉納、草摺八枚ある異式のもの）　一領
一、白絲妻取鎧　一領
一、藍革威鎧（後三年役頃と謂ふ）　一領
一、薫革威胴丸（鎌倉時代）　一領

一、色々威鐵腹卷（小手の附屬せる腹卷は他になしと謂ふ）　一領
一、紺絲威膝鎧　一雙
一、兵庫鎖太刀（護良親王御寄附と謂ふ）　一口
一、螺鈿飾太刀（平重盛奉納）　一口
一、神額（正曆年間　參議藤原佐理筆）　一面

日本總鎭守
大山積大明神
竪三尺四寸
横二尺二寸

一、大山祇神社古圖（室町時代）　一幅
一、法華經　社傳弘法大師筆　八卷
一、仁王經　社傳傳敎大師筆　一卷
一、綸旨院旨御敎書之卷　二卷

等であつて、中に元久、嘉禎、仁治、建長、正應、弘安、建武、以下公武の下文や寄進狀などもある。兎に角多數の國寶級の武器を一堂に藏して居り、我國武器の沿革、變遷を短時間の內に知る事が出來たのは何よりの好收獲であつた。

神社を午後二時十五分に發ち、もと來た道を戻り、宮浦で便船に乘り、安藝の竹原港に向ふ。航行約三十分で着く。同所よりバスに乘り、省線竹原驛に至る。

斯くして幸に天候に惠まれて、四日間に亙る有益且つ想ひ出深き見學旅行も無事終了した。例によつて忙しい見學を續けたが、參加者一同の總親和によつて、極めて愉快に目的を果し得たことは洵に喜ばしい。此れより各自自由行動をとることとし、西に東にそれぞれ志す方面に向つたのであつた。最後に本旅行に於いて先輩堀野氏を始め、各方面で與へられた御好意に對して厚く感謝の意を表する次第である。（淺村一郎記）